

第3節 白石構内（白石遺跡）の調査

1. 教育学部附属山口中学校校舎等改修その他工事に伴う予備発掘調査

調査地区 白石構内

調査面積 約121㎡

調査期間 平成19年6月13～7月3日

調査担当 田畑直彦

調査結果

(1) 調査の経緯

教育学部附属山口中学校で校舎等改修その他工事が計画された。工事は山口中学校校舎にエレベーターとスロープを設置し、設備配管を新設するものである。今回工事が計画された校舎周辺においては、平成2年度の汚水排水管布設に伴う発掘調査で縄文時代晩期の遺物包含層や弥生時代終末期の遺物包含層・溝状遺構^{註1}などが検出されている。このため今回の工事箇所についても、上記に関連する遺構・遺物の検出が予想された。

このため、埋蔵文化財資料館専門委員会の指示のもと、(発掘調査を要する工事計画として、平成18年3月16日埋蔵文化財資料館専門委員会承認)、埋蔵文化財資料館が予備発掘調査を行った。なお、エレベーター設置箇所は建物に隣接していることから、建物工事および既設配管による掘削で攪乱されていることが予想されたため、立会調査を行うこととし、スロープ設置箇所及び新設の配管工事箇所を対象として予備発掘調査を行った。

(2) 基本層序

基本層序は下記の通りである。

第1層 表土(1-1～2に細分、層厚約10～20cm)

第2層 造成土(2-1～2に細分、層厚約10～20cm)

第3層 耕土もしくは床土(3-1～5に細分、層厚約10～30cm)

第4層 河川埋土(4-1～26に細分、層厚120cm以上)

調査による掘削深度は、スロープ設置箇所では工事掘削レベルである現地地表下約60cm（標高27.8m）までにとどめた。また、配管工事箇所では調査区南部で現地地表下約70～130cm（標高約27.1～27.7m）、その他の箇所では最大で現地地表下約150cm（標高約26.9m）まで掘削を行った。

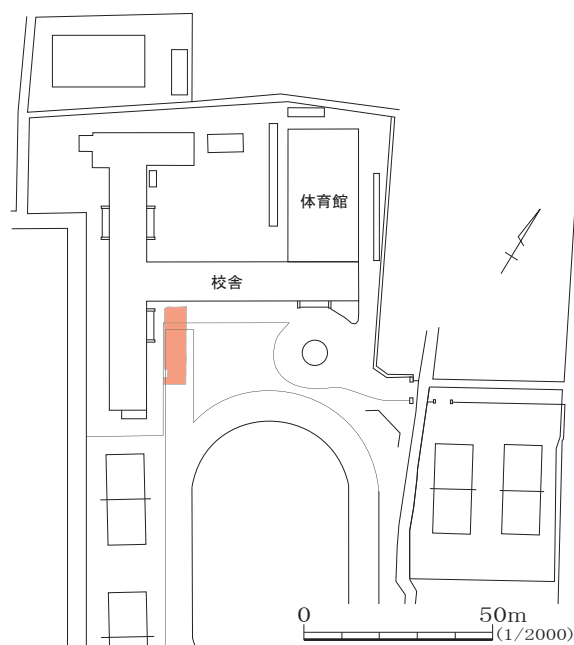


図 19 調査区位置図



写真 25 調査前全景（北から）

白石構内（白石遺跡）の調査

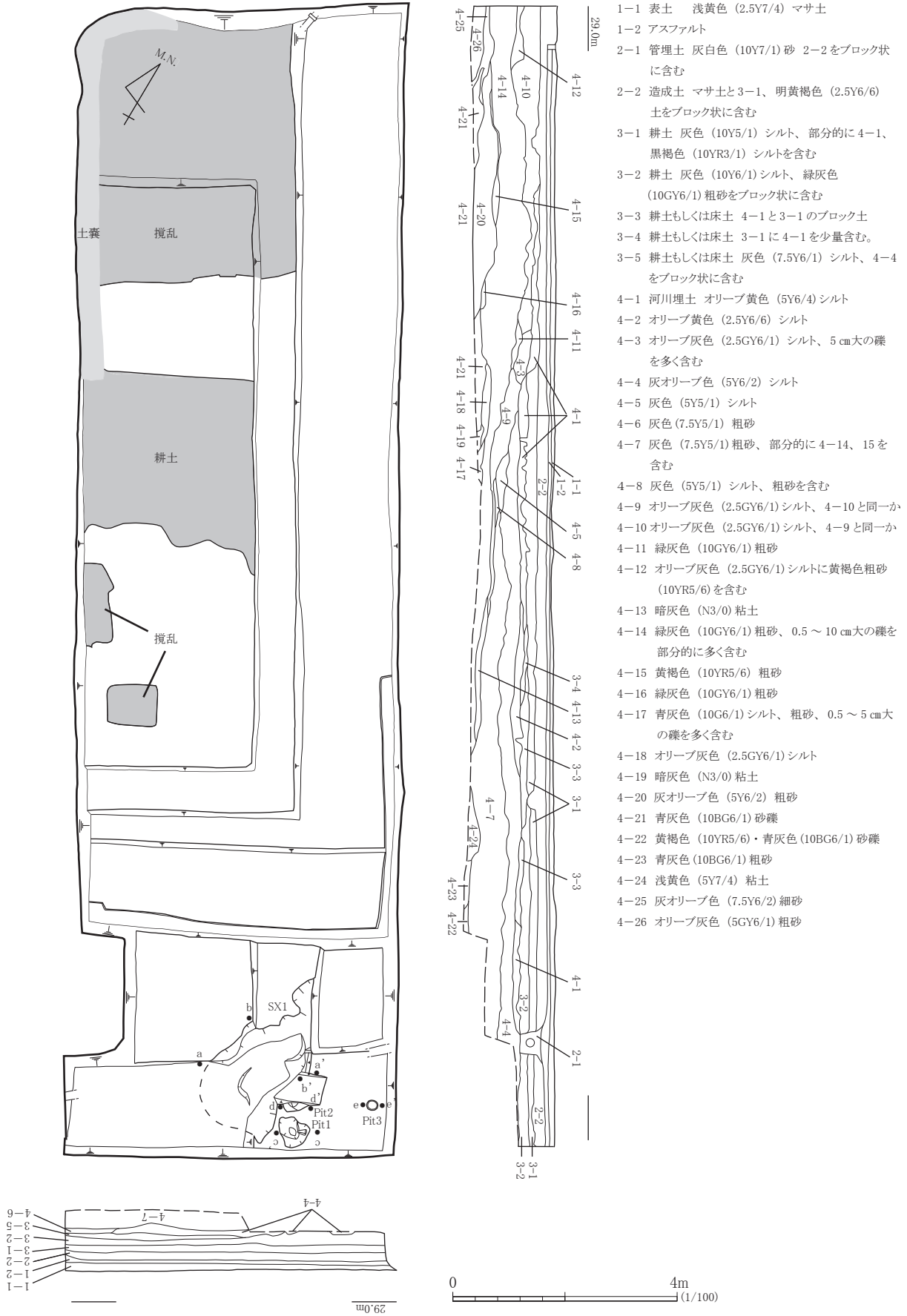


図 20 調査区平面図・断面図

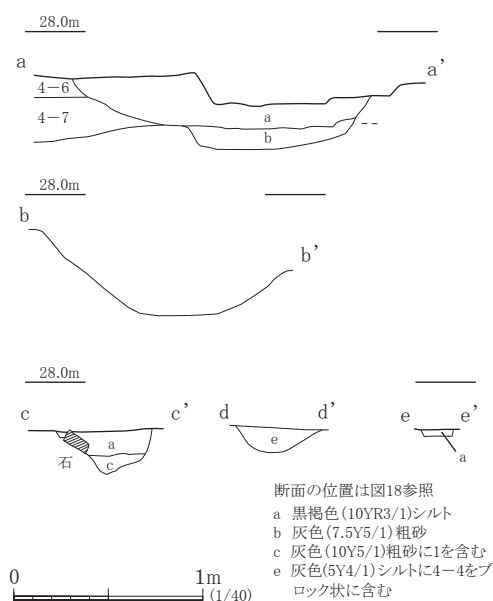


図 21 調査区遺構断面図

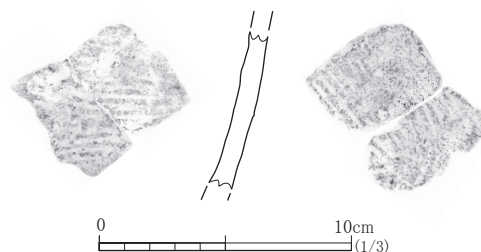


図 22 出土遺物実測図



写真 26 出土遺物

調査区中央～南部では第1層、第2層の直下で第3層が検出された。第3層は近世～近代の水田耕作に関わる土層である。耕土と床土を明確に識別できなかったが、いずれも第4層もしくは黒褐色(10YR3/1)シルトをブロック状に含んでいた。黒褐色シルトは遺構ないし遺物包含層埋土と考えられ、同層には調査区南部を中心に弥生土器・土師器片・中世の瓦質土器片を含むことを確認した。従って、近世～近代の水田整備により、遺構及び包含層が削平されたと考えられる。第4層は縄文時代以前の河川堆積土と考えられる。第4層の上位は弥生時代以降の遺構面で、調査区の南部では第4-4層〔灰オリブ(5Y6/2)シルト〕で弥生～古墳時代の遺構が検出された。第4層の下位が砂礫・粘土層で、調査区北部の第14-4層から縄文土器片1点が出土した。なお、第4-19層～4-26層は上層よりもやや硬くしまりがあるため、縄文時代でも時期はさらに遡る可能性がある。

(3) 遺構

調査区北端部は校舎建築時に伴うものと考えられる攪乱が著しかった。これより南のスロープ設置箇所では掘削深度を現地地表下約60cmにとどめたため、中央部に耕土(第3-1層)が残り、第4-1層、4-2層を検出面として攪乱を検出したのみである。一方、調査区南部では落ち込み1基(SX1)、ピット3基を検出した。なお、SX1とPit2については、排水管により一部が破壊されていたほか、機械掘削中に同管が破裂して排水が大量に溢れたため、遺構の一部が崩れてしまい、完全な形状で検出することができなかった。SX1は最大幅約264cm、長さ270cm以上、深さ41cm。Pit1の平面規模は54cm×62cm、深さ22cm。Pit2はd-d'間が46cm、深さ14cm。Pit3は直径19cm、深さ4cm。SX1は北・南端部を欠いており、また調査区壁面においても断面は確認できていないが、埋土の下層が灰色(7.5Y5/1)粗砂であることから、本来は溝であった可能性がある。SX1、Pit1～3からは弥生土器ないし土師器と考えられる土器片が出土しているが、細片であるため詳細な時期は判別できなかった。

(4) 遺物

第4-14層から縄文土器片1点、第2・3層から中世の瓦質土器片、近世～近代の陶磁器片、本来は包含層・遺構に含まれていたと考えられる弥生土器・土師器片が出土した。遺構に伴うものとして、SX1・Pit1～3からは弥生土器ないし土師器と考えられる土器片が出土したほか、Pit1からはスラグの



写真 27 調査区全景 1（西から）



写真 28 調査区全景 2（東から）



写真 29 調査区東壁土層断面（西から）



写真 30 調査区南壁土層断面（北西から）



写真 31 調査区南部遺構検出状況（北東から）



写真 32 SX1 土層断面（北西から）



写真 33 Pit1、2 半裁状況（北西から）



写真 34 Pit3 半裁状況（南東から）



写真 35 調査区南部遺構完掘状況（北東から）

細片が1点出土した。図20は第4－14層から出土した縄文時代後～晩期の深鉢胴部片である。外面に左上がり、内面に横方向の2枚貝条痕を施すが、摩滅が著しい。

（5）小結

今回の予備発掘調査では、弥生時代以降の遺構面よりも下位に堆積した砂礫層から縄文土器深鉢胴部片が1点出土した。平成2年度の污水管敷設に伴う発掘調査^{註2}では、A・B区で弥生時代終末期～古墳時代初頭の遺物包含層の下に縄文時代晩期の遺物包含層が堆積しており、地山はA区が「グライ度の高い緑灰色礫」、B区が「緑灰色礫」であった。また、A区では地山を検出面として弥生時代終末期の溝状遺構が1条検出されたほか、今回調査区の南西側に隣接するD区でも「グライ度の高いオリーブ灰色系の地山」を検出面として時期不明の溝状遺構が1条検出された。しかし、今回調査区南部の遺構検出面が標高約27.8mであるのに対して、遺構検出面の標高はA区が約27.5m、D区が約27.4mであり、いずれも造成土の直下が遺構検出面であった。よってA・D区では本来の遺構面は削平されており、検出された遺構面は今回調査の第4層下位に相当する可能性が高い。今後の発掘調査により、弥生時代以降の遺構面以下の土層を精査し、縄文時代晩期の遺物包含層との関係を含め、その形成状況を明らかにする必要がある。

また、今回の調査区南部では弥生時代もしくは古墳時代と考えられる落ち込み1基とピット3基を検出した。近年、中学校敷地の約200m北側、教育学部附属小学校敷地の南側を流れる五十鈴川の砂防工事に伴い山口県埋蔵文化財センターにより行われた発掘調査^{註3}では、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての遺物包含層・古墳時代中期の河川跡が検出され、白石遺跡に当該期の大規模な集落が存在したことが明らかとなりつつある。中学校敷地においても今後の調査による詳細の解明が期待される。

[註]

- 1) 河村吉行（1992）「第2章 亀山構内教育学部附属山口中学校污水管布設に伴う発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報X』,山口
- 2) 前掲註1
- 3) 小南裕一（2006）「Ⅲ調査の成果」「Ⅳまとめ」,財団法人山口県ひとつくり財団 山口県埋蔵文化座センター(編)『白石遺跡』,山口

2. 教育学部附属山口中学校校舎等改修その他工事に伴う立会調査

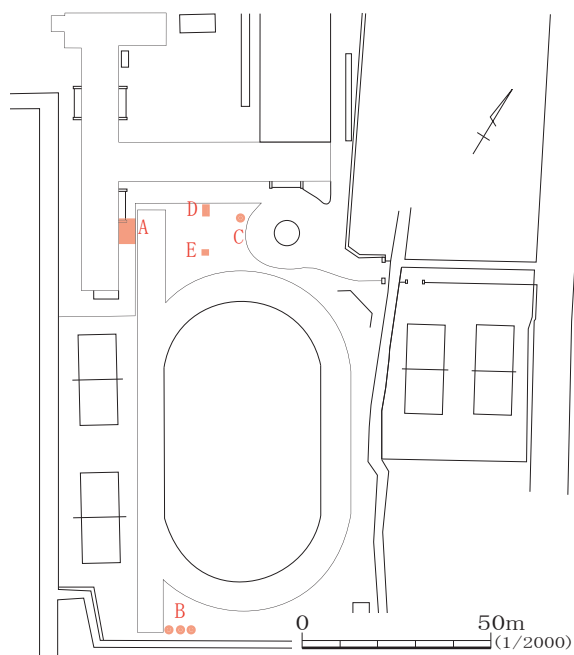


図23 調査区位置図

調査地区 白石構内

調査面積 約38㎡

調査期間 平成19年8月6日、10月26、30日

調査担当 田畑直彦

調査結果 教育学部附属山口中学校校舎等改修その他工事に伴い、前節の予備発掘調査に続き、A～E地点で立会調査を行った。A地点はエレベータ設置箇所である。校舎建設により大部分が攪乱されていたが、東側の一部で土層を確認した。現地表下約59cmまでが造成土、59～64cmが床土である明黄褐色（10YR7/6）シルト、64cm～140cmが黒褐色（10YR2/2）シルト、灰色（10Y7/1）シルト、灰オリーブ（7.5Y6/2）粗砂からなる河川堆積土であった。B・C地点は樹木移設による掘削である。現地表下約35cmまでを掘削したが、造成土の範囲内であり、埋蔵文化財に支障はなかった。

D・E地点は排水管の集水枡設置に伴い掘削が行われた。D地点では、現地表下約62cmまでが造成土、62～120cmが黄灰色（2.5Y4/1）シルト・灰白色（5Y7/1）粗砂からなる河川堆積土であった。また、現地表下約120cm（掘削底面）で弥生時代以降の遺構面と考えられる橙色（7.5YR6/6）粘土を検出した。なお、灰白色粗砂からは時期不明の土器片1片が出土した。E地点は現地表下約60cmまでが造成土、60～70cmが耕土である灰色（10Y5/1）シルト、70～85cmが床土であるオリーブ灰色（10Y6/2）シルト、85～107cmが遺物包含層と考えられる黄灰色（2.5Y4/1）シルトであった。また、現地表下107cm（掘削底面）で弥生時代以降の遺構面と考えられる灰色（10Y6/1）シルトを検出した。

D地点付近では過去の調査でも河川堆積土と推測される土層が検出されていることから、調査区周辺においては今後とも埋蔵文化財の保護に十分な注意を払う必要がある。



写真36 A地点東壁土層断面（北西から）



写真37 D地点土層断面（西から）

[註]

- 1) 河村吉行（1987）「第2章第3節 教育学部附属山口中学校部分の調査」、山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報VI』、山口